

# 園のくらしを育む 8

## 日本の保育文化(2) — 芋掘り —

秋田喜代美

### 1 掘る経験を奪う親切心と平等意識

秋になると、園の畑で、あるいは遠足等でどこかの農園に行つて、芋掘りをするのが日本の多くの園で行なわれています。芋掘りは、つるを引き、掘ると土の中から芋が出てくるといふ、芋との出会い体験のもつワクワク感があります。

芋は、ミニトマトやキュウリなど、植物の成長していく過程が目に見える植物とは異なる特性をもっています。主食になることもあり、焼き芋大会や芋煮会などは、食欲の秋を皆で楽しむ日本の文化として伝えられてきた活動ともいえます。また芋の長いつるは、それを使つて料理もでき、子どもたちにとっては、その長さで丈夫さゆえに子どもの着想に沿つていろいろなものを作り出す遊びの契機にもなります。

この芋を巡る体験を、保育者は子どもたちに描画や造形などとして表現させたいと願い、設定活動とすることが多いように思います。芋掘りの時期に保育室の掲示を見ると、どの



園でも子どもたちの絵が飾られています。

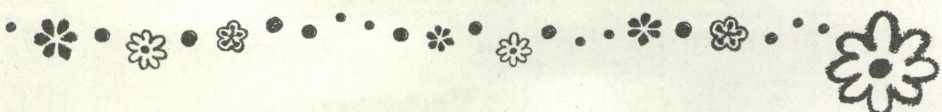
東京の中心部の、ある園に研修でうかがった時でした。土の中のお芋が力強く描かれています。ところが、地面の上にはつるや葉はなく、どの子も二本の茎だけが少しだけ付いた絵を描いています。私にはアンバランスな絵に思え、研修で先生方に尋ねました。すると、農園に行くと、皆が平等に掘りやすいように、すでにつるはきれいに取り除かれ、一人二株ずつになっているので、それが絵に表れているのだとわかりました。一人だけ、つるや葉を描いている子がいました。先生たちから「毎年こういう絵なので、言われるまで何も感じなかった。あの子だけ違うと思うてはいたけれど」という返答が戻ってきて驚きました。その子だけは祖父母の所に遊びに行つて、芋掘りの経験をしてきたからでしょうということでした。

芋掘りは芋を得て持ち帰ることだけではなく、「芋を掘る」という農業労働の一端であり、その行為を丸ごと追体験することが本来の経験ではないのだろうか、それが大人の親切心と効率的な発想で奪われてしまっているのではないかと感じました。多くの子が家庭では経験できない、園ならではの活動であればこそ、そのコアとなる経験として何を保障するのかを考えることが求められているといえるでしょう。

## 2 芋を巡る経験の連続性

別のある保育園で、前年の保育課程と食育計画、期案や週案、日案とその振り返りの日





誌、芋掘りの後で芋の絵を描く活動をした時に写した三・五歳児各クラスのDVDなどを  
持ち寄って、芋の苗植えから芋掘り、そしてその後の芋を巡る子どもたちの経験のつなが  
りを、皆で振り返りながら語り合うことをしました。その園ではスペースの関係もあり、  
自園の中では年長児が芋の苗を育てていますが、掘るのは二歳児クラス、三・五歳児は近  
くのお百姓さんの畑で芋掘りをするにしてみました。

芋掘りの後の活動として、三歳児、四歳児はそれぞれ各自（三歳はクレヨン、四歳は絵  
の具で）絵を描き、五歳児は大きな紙でのカラーペイントを使った共同制作をしていまし  
た。先生たちは、絵を描く日にはそれぞれお芋にかかわる絵本を読み聞かせ、掘ってきた  
芋を保育室に持ち込むといった設定をされていました。三歳児では「洗うと色が違うね」  
と、土の付いた芋と洗った芋を比べ、四歳児ではそれぞれに芋が目の前に配られ、描く活  
動をされていました。その時もやはりお芋は描かれますが、芋掘りの様子や、芋のつるや  
葉は描かれていませんでした。それはここでもお百姓さんが掘りやすい準備をしてくれて  
いるからです。芋掘り後の活動のつながりやあり方を先生たちと考え、今度はどのように  
していったらよいだろうと、いろいろな可能性を話し合うことができました。

やはり自分たちで育てた芋を自分たちで掘る経験をさせたほうが子どもたちにとって収  
穫の喜びは大きかったのではないか、いままでお兄さんお姉さんの分をやって  
あげていたがそれでよかったのだろうかという話が出ました。また、絵本を読んだりしな  
くても、芋掘りをしている時の写真を見合ったり、持ち帰った芋があれば、描くのはよ



かったのではないだろうかという話も出ました。さらに、お百姓さんに掘らせてもらいに行きただけだったけれど、お散歩の時に芋畑を見たり、芋掘りをさせてもらった後、「子どもたちがお陰でこんな絵を書いたんですよ」と報告したりすれば、もっと密に連携できたかもしれないという話も出てきました。芋を掘り上げ、収穫に至った喜びを子どもたちがもてるようにしていくには、どのような活動こそが経験の連続性をつくり出すのかを振り返りました。

ジョン・デューイは著書『経験と教育』の中で、「あらゆる経験は、願望や意志とはまったく無関係に、引きつづき起こってくる更なる経験のなかに生きているのである。したがって、経験に根ざした教育の中心的課題は、継続して起こる経験のなかで、実り豊かに創造的に生きるような種類の現在の経験を選択することにかかっているのである。」と述べています。私たちが先輩たちから伝統的に受け継いできている活動においても、どの経験が、子どもたちにとって、より実り豊かで創造的な経験を生み出し得るのか、なぜその経験を、いま、この子どもたちにしてほしいと願うのかを改めて少し長い目で見て振り返ることも必要かもしれないと感じさせてもらった研修でした。

皆さんの園ではどのような経験が保障されていますか。

(東京大学大学院教授)

#### 注(引用文献)

ジョン・デューイ『経験と教育』市村尚久訳 講談社学術文庫 二〇〇四年 p. 34、35